

## マタイによる福音書 11 章 12 節 「激しく攻める神の国」

### 1A 近づいた御国

1B ヨハネを引き継ぐ宣教

2B 御国の現れ

### 2A 激しく攻める神の国

1B 三位一体の神

1C 主のバプテスマ

2C 父なる神への服従

3C 聖霊の満たし

2B 攻められる御国

## 本文

今朝は、マタイによる福音書 11 章 12 節が本文です。「バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。」

私たちの生きている社会と世界は、目まぐるしく変わっています。私個人は、聖書の舞台となっている中東地域に関心が強いですが、そこでこれまでの歴史を大きく転換させる出来事が現在進行中です。それは、イスラム国の出現です。私たちは、テレビの映像やニュース記事などで、彼らの残虐な行ないばかりが目に入りますが、いったい何を目指しているかということについてはよく調べないといけません。それを知るには、今のイスラム国の勢力地図を手にする必要があります。イラク北部からシリアをまたいで勢力範囲があります。それが彼らの大きな意図です。「イラク」という国、「シリア」という国は、イギリスとフランスが人工的に引いた国境によって作られた国であり、かつイスラム教のオスマン・トルコを倒した後にできた国であります。イスラム国は、この欧米列強によって作り上げられた人間の国を、アッラーの支配する、イスラム法による国に変える目的を持っています。だから、イラクとシリアの国境をまたいでいる戦闘士の姿が彼らの意図を象徴的に示しています。彼らの中に、近代以降作られた国家という概念がないのです。

私たちは、この日本という国に住んでいて、「国」というものを意識することが少ないですね。けれども中東に行きますと、話が違います。そこには古代が現代に入り組んでいる姿をみます。時間がそのまま止まったかのような空間をみます。同時に、イスラエルでは非常に先進的な技術と、近代国家の理想のような姿もみます。例えば、ベドウィンと呼ばれる遊牧民がいます。彼らには、交通法は通用しません。どんな大きな通りも、どんなに車が走っていても、全く度外視して歩き続けます。古代遺跡の敷地も平気で通過します。国境さえ乗り越えるのではないかという雰囲気です。これは紀元前二千年頃の、アブラハムの族長時代と変わらない姿なのです。そしてイスラエ

ルでは、固定の住居がなければ彼らに国民の権威を与えることができないのに、ベドウィンにはその概念がありません。新しい家を政府が作っても、そこを家畜小屋にしてしまう有様です。

その反面、本当に近代国家は正しいのか？という疑問を抱いてしまうような象徴的な姿があります。パレスチナ自治区とイスラエルを分離する、分離フェンスの存在です。あまりにも細かい区分を、いちいち決めていきます。ユダヤ人とアラブ人が入り組んで住んでいるところもあるのに、そこをいちいち区分けして、棲み分けているのです。いっそのこと、国境はなくしていい加減にしたらいいんじゃないの？と感じてしまいます。ここが味噌です。中東の人々は、何が支配しているかということに大事にするのであって、地理的な区分けや国家というものを度外視して生きているので、そこに欧米によって作られた国家意識というのは、私たち日本人のように根づいていないのです。

ここで私たちは考えなければいけません。実は、私たちが、キリストのうちにある者として同じような国の相克の中に生きているのだということです。国と国のせめぎ合いの中に生きているのだということです。イエス様がここで、天の御国が激しく攻められていると言われました。これは翻訳によっては、その反対の、「天の御国が激しく攻めている」とも訳することができるものですが、いずれにしてもこの地上にある国に、神の支配する領域が入り込んでいる状態をお語りになっています。そして地上における人間の国だけではありません。世界の造られた時に、神のみの支配に対して反乱して、今も反乱している悪の勢力、サタンの国もあります。したがって、天からの国が地上に入り込んでせめぎ合いの中にあることと、サタンとその手下の悪霊どもの支配している領域との、そのせめぎ合いの中に、そのちょうど分岐点のような境目のところに、私たちキリスト者が置かれているという事実確認が必要であります。

## 1A 近づいた御国

### 1B ヨハネを引き継ぐ宣教

私たちはこの合同修養会で、山上の垂訓を学んでいます。山上の垂訓は、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」という言葉から始まる、天の御国、あるいは神の国の到来の中で、イエスはその国が何であるかを宣言したものであります。ヨハネの日以来、ここで主がお語りになっているので、そのいきさつを辿っていきましょう。ヨハネがユダヤの荒野に現われた時に、その教えはこういうものでした。「悔い改めなさい。天の御国は近づいたから。(3:2)」天の御国が今、すぐそこまで迫ってきます。押し寄せて来ています。だから、悔い改めなさい。さもないとあなたは神の怒りの火によって燃やし尽くされるという宣教の言葉を語りました。

そしてイエスご自身が彼からバプテスマを受けられて、荒野での誘惑を経て、そしてガリラヤ地方から宣教を開始されて言われました。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。(4:17)」そして弟子たちを召し出されて、宣教活動を本格化させました。それが、ここで主の言われている、「バプテスマのヨハネの日以来今日まで」という言葉の経緯です。バプテスマのヨハネが、旧約時代に語られていた預言者の最後の人であり、神の国がこの地上に到来することを教える人であり、

そして今、律法と預言者を全て成就するメシヤが来られたということでもあります。

## 2B 御国の現れ

そこでイエス様は、弟子たちを召し出されて、4章23節を見ますとこうあります。「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。」イエス様は、神の国にある良い知らせを宣言されました。御国の福音を宣べ伝えられました。その宣教は、一つに「会堂で教えた」とあります。主はその教えられることに権威を持っておられました。それは単に悟るための教えではなく、悪霊どもも、また嵐さえ従う力を持ち、権威を持っておられる言葉です。私たちが、聖霊の力によって神の言葉を語る時に、それを聞いて従う者たちに、とてつもない神の力が現れるのと同じです。それが神の国が入り込んできたことの印であります。

そして、その御国の福音が、あらゆる病気や患いを直されたところに現われているのです。病を負っているというのは、どういうことなのか？それは、罪から来る結果であるということです。旧約時代において、神に背き、その背きのために心も体も傷を負っている姿として神は言い表しておられました。エレミヤの時代、偽預言者たちについて神は、「彼らは、わたしの民の娘の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。(8:11)」と言われて、深い傷を負っているのに表面的な治療で、「大丈夫だ」と言っている姿を酷評されたのです。それで、イザヤは預言して、主のしもべはご自身に病を負い、傷を負われたということ、「彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(53:5)」という言葉につながるのです。ですから、イエス様が病を直されるということは、アダム以来、罪の支配の中にあるものを解放するという、単に病気が治ること以上の、神の国の回復の姿があります。

そして、集まってきた大勢の群衆に対して、特に弟子たちを身近に引き寄せてお語りになり始められたのが、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。(5:3)」という言葉であります。ですから、私たちは神の御国に触れる時、イエスという方の中に入る時、顔が真っ赤になるような恥ずかしさ、自分のどうしようもない姿、自分の持っている闇が明らかにされる形で始まります。パプテスマのヨハネの説く、神の怒りの火が地上に下るというのも恐ろしいことでしょう。しかし、もっと恐れ慄くことは、自分というもののあり方がまるでなっていないということに悟り、自分を全く否定された、自尊心も自分を生かすことも全く吹き飛ばされてしまうような、「もう、私はだめだ。」という、自分が腐ってしまうような絶望感です。その時に幸いが来るのだ、とイエス様は教えられます。その時に、天の御国の実体があなたに押し寄せてきたのだ。あなたは、御国の中に入っており、御国の市民になっているのだと宣言してくださっているのです。

そしてイエス様が5節で、「柔和な者」あるいは、「へりくだる者は幸いです。」と言われますが、へりくだりとは自分がいかに卑しい存在かを見なすことではなく、自分というものがなくなり、神そしてキリストご自身だけになる姿であります。この方が自分の心の隅々まで満ちていく姿であります。

私たちはへりくだっている人という言葉を知ると、控えめな人、あまり意見を主張しない人、そういう人のことを考えますが、聖書のへりくだりは、そういった真面目な人よりも、表現が悪いかもしれませんが“オタク”のような人です。自分の好きな領域に入れば、そこには自分というものはいません。その世界にのめり込んで、すっかり他のことを忘れていてる人です。もちろんオタクは、ある意味で偶像礼拝ですが、まことの神、まことの主キリストを思って、他のことを忘れていてる人です。

## 2A 激しく攻める神の国

このような人のところに、神の国が臨みます。そしてイエス様は、いろいろなところに行って、御言葉を教えられ、病人を直し、悪霊を追い出しておられる中で、バプテスマのヨハネが獄中からイエス様に質問を送ってきました。ヨハネの弟子が、イエス様のところに行って、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか。(11:3)」と尋ねたのです。そこでイエス様は、メシヤが行われることとしてご自身も行なっていることを伝えられました。そして群衆に対して、ヨハネについて語られたのです。

### 1B 三位一体の神

「天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。」という主の御言葉は、具体的には何を指しているのでしょうか？先ほど話しましたようにギリシヤ語の文法から、正反対の意味になります。天の御国が激しく攻めている、奪い取るようにして攻めているとも訳せるし、新改訳のように受動態で訳すこともできます。私はどちらも真ではないか、と思います。まず、攻められていることについて考えてみましょう。ヨハネが獄中に入れられています。これは、彼がヘロデ・アンティパスの行なっている悪事を責めたからです。それで世俗の王ヘロデは、彼を牢獄に入れたのです。彼は後に、ヘロデヤの企みで斬首されます。イエス様は、ご自身も世俗の権力の中で、また宗教権力の中でこのように攻められることを知っておられました。

私たちは今、神の国が進むところに必ず激しく攻めるもの、それを奪い取っていく者たちの姿を見ます。地上にある権力によってもそうですし、また霊的な勢力によってもそうです。地上にある権力であれば、今、世界中で、特に中東地域で教会史においてもここまではなかったのではないか？と思われるようなキリスト教徒に対する迫害があります。イスラム国が支配した町の一つがモスルというところ。そこに、かつてのアッシリヤ帝国の首都ニネベがありました。そのアッシリヤ人の末裔に、イエス・キリストの福音が宣べ伝えられ、千年以上もの間、そこでアッシリヤ人のキリスト教徒が共同体を作って住んでいたのです。ところが今、ほとんど皆無になりました。全ての人がイスラム過激派の手を逃れるために、避難民になったのです。北アフリカにあるキリスト教徒も、何百万という単位で数年に渡って迫害を受けました。まさに、ホロコーストの六百万人の殺されたユダヤ人に近づくほどの人数で殺されていったのです。現在、一億人に及ぶキリスト者が迫害の中にあるという統計が出ています。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> <http://www.reuters.com/article/2013/01/08/us-religion-christianity-persecution-idUSBRE9070TB20130108>

霊的にも私たちは、大きな岐路に立たされています。主に用いられた器が、もちろんですが歳を取り、天に召されていきます。遺された者たちがいます。まさか、この人が？という人たちが罪を犯します。まさか、この人たちが？という人が、考えられない発言をします。そして、聖書から、福音から離れていってしまっています。激しく攻める者たちがいるのです。

しかし同時に、もう一つの正反対の方向がもっと進行しています。これら激しく悪の勢力が攻め入っている所に、むしろ激しく神の国が攻め入っています。中東において、例えばイランは、1979年イスラム革命が起こり、イスラム化が起こりました。ところが、それまで数百人しかいなかった信者が一気に、何人か分かりませんが、幾何級数的に増えているのです。迫害を受けている、信仰の自由が制限されていると言われていたような所に、ますますキリストの教会が建てられているということなのです。これが神の国が激しく攻めていることです。迫害を受けながら、いや受けているからこそ広がるのが、キリストの御国です。イスラムは剣でもってその勢力を拡げますが、キリスト者は剣を受けながら、その勢力を拡げるのです。いや、キリストが迫害を受ける者たちを通してご自分の国を拡げておられるのです。そうです、キリスト者が弱くなればなるほど、悩めば悩むほど、むしろ私たちが低められ、その弱さの中にキリストの力が現れて、その力が神の御国なのです。

使徒の働きがそうでした。エルサレムに教会に対する迫害があったからこそ、福音が拡散して、サマリア地域に、そして小アジア、ギリシヤ地方、さらにローマへと伝わりました。パウロがキリスト者を迫害するユダヤ教テロリストだったからこそ、異邦人への宣教が進み、キリスト教会の土台が据えられました。黙示録を見れば、教会が激しい迫害を受けています。むしろ教会の霊的危機は、生きていとされているのに実は死んでいる、また熱いか冷たいかどちらかでもない生ぬるさが危機であり、迫害ではないのです。患難時代には、聖徒たちが世界中に起こされると同時に、とてつもない迫害が信者に対して与えられています。次のパウロの言葉に集約されるのでしょうか。「私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。(ローマ 8:35-37)」

### 1C 主のバプテスマ

私たちが、そのような神の国に入るのは、私たちの信じている神ご自身の中に、その性質があるからです。御国が導入される出発点、すなわちイエス様がヨハネからバプテスマを受けられるところを見ましょう。「こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。(3:16-17)」三位一体の神です。イエスがバプテスマを受けられるということは、私たち信者の模範であると同時に、イエスが

私たち、この地上に生きている者たちと一体になってくださる表れでした。そこで父なる神が関わっておられます。「これは、わたしの愛する子」と呼ばれています。さらに聖霊が関わっておられます。鳩のように下ってこられました。この父、子、聖霊の神によって始まったのが天の御国です。そしてキリストの弟子になるということは、父、子、聖霊の名によってバプテスマを受け、権威あるイエスの言葉、その教えを命令として受け入れるということでもあります。

### 2C 父なる神への服従

国というものは、権威が一つしかありません。どんな共同体でも権威は一つしかありません。夫婦では、夫が妻のかしらです。自動車のハンドルは一人しか握ることができません。けれども、もし国に二つの権威があれば、分裂して滅んでしまうか、戦争状態になります。必ず一つしか権威というのは存在しえないのです。三位一体の神においても同じです。父、子、聖霊はまったく同質のお方であり、それぞれが神です。けれども、神は唯一です。しかし、その三つの位格、人格の中で権威系統がはっきりしています。父なる神が権威者です。第一格であります。そしてキリストは子として父に完全に服従されます。第二格であられます。そして聖霊は、父とキリストに遣わされ、キリストを証します。第三格であります。

イエス様は、天においても、地においても、いっさいの権威が与えられていました。それは、イエス様は御子として、ご自身ではなく御父の権威と裁きの中にご自分の身を委ねられたからです。主はユダヤ人と安息日のことで議論されました。「そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです。父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。それは、すべての者が、父を敬うように子を敬うためです。子を敬わない者は、子を遣わした父をも敬いません。(ヨハネ 5:19-23)」

多くの人が服従すると、それだけ自分に権威がなくなると思っています。その人は、服従の意味を分かっていません。服従するということは、その権威者の権威が自分に任されることを意味します。奥さんが夫に従えば、すべての責任は夫が負うことになり、夫がすることによって自分はいろいろなことをすることができます。車の助手席にいて、ナビをすることができるのです。ハンドルは夫が握りますが、妻は行くべきところを指し示すこともできるのです。イエス様は一切のことを父なる神にゆだねられました。ゆえに、父が裁かれることをご自身も裁かれるのです。しかし、それは自分が裁くのではなく父が裁かれるのです。こうやって、御子が御父に服従されることによって一つになっておられました。

### 3C 聖霊の満たし

そして、ヨハネ 3 章 34 節にはこう書かれています。「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。」イエスは、父なる神から御霊を無限に与えられておられました。ゆえに、イエスは聖霊に満たされてご自分の宣教を行われたのです。聖霊がご自身の行なわれていることの証しを、人々に与えられました。聖霊がおられることによって、イエスが誰であるかを弟子たちは悟ることができました。

そして使徒ヨハネは第一の手紙でこう言います。「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。(1:3)」私たちが三位一体の神の交わりに中に招き入れられました。ゆえに、同じように神に服従する生活、同じように聖霊に満たされる生活を送ります。イエスが父なる神に従われたように、私たちは一切の力と知恵を、キリストに明け渡します。まったく自分を捨てて、キリストが願われていることを願い、キリストが考えられていることを考え、キリストが行われていることを行なうのです。この方に付いていき、この方に結ばれて、この方と一つになっていること、これが私たちの務めです。そして、キリストが聖霊で満たされたように、私たちもキリストの下さる聖霊のバプテスマを受けます。このバプテスマによって、自分ではなく聖霊ご自身が周りの人々に、キリストが真理であることを証してくださるのです。

### 2B 攻められる御国

ここで大事なことがあります。神がキリストにおいて、また御霊によってこの世と和解してくださいました。創造主を信じないこの世に対して、世を罪に定めるのではなく、むしろキリストにあってその罪をご自分が負ってくださいました。「神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為に責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。(2コリント 5:19)」ご自身の支配を掲げる時に、ご自分の国を掲げる時に、神は反逆する者たちを滅ぼすのではなく、むしろご自身の中でその滅びを受けてくださり、それで聖霊によってその反逆者と和解しながら、世界にご自身の領域を広げられるのです。キリストは平和であられ、そして平和を造る者は神の子どもと呼ばれます。

攻められながら、攻めるのです。悪を被りながら、善によって相手を獲得します。ダビデが、決して敵に対して手を下さなかった、その柔和によってイスラエルを北と南を統一させ、王国を築きました。それは、私たちが三位一体の神と交わっているから、この方と一つにされているから、それで可能になるのです。私たちではなく、私たちを通して、私たちの内で神がご自身の国を掲げられます。

こうした視点から、山上の垂訓を読めばすべてがつながることでしょう。自分ではないということ、すなわち心を貧しくしなければいけません。そして義のために迫害されることは幸いなのです。なぜなら、迫害を受けることによって、自分のうちにキリストが現われるからです。この世と和解してくださるキリストが、その迫害を幸いなものとしてくださいます。そして、迫害を受けている中で、

人々からの称賛、人々から良く思われたいという気持ちはなくなるでしょう。むしろ、独り部屋で父なる神に祈ることこそが喜びになるでしょう。そして思い煩いも主にゆだねることができます。迫害の中で、自分の持っている者が取られます。けれども主なる神が、その必要を満たしてくださいませ。そして迫害の中では、裁きをすべて神にゆだねます。裁かれるのは神なのです。私たちがすることではありません。そして、兄弟に対して間違っているという前に、自分自身がどうなのかを吟味するように導かれます。

そして、イエスは「狭い門から入りなさい。」と言われました。その狭き門とは、自分の義、自分の行ない、これらのものが一切取れてしまった状態です。律法と預言者の成就であられるイエスご自身が狭き門であります。

最後に、私たちは、次のイスラム原理者の言葉から、神の国のせめぎ合いを知ってみたいと思います。先日、大学生がイスラム国に行こうとするのを手引きして、公安に家宅操作された元大学教授の言葉です。「中東で、日本で、いつ捕まっても、殺されてもおかしくはない。その時、誰にも迷惑をかけないよう、同志社大学教授の職を辞し、日本ムスリム協会理事の地位、会員の身分も捨て、殺されても捕まっても失うものがないように家も財産も処分した。全ては真実と信ずることを語る自由を確保するためだ。…届けるべき者にだけ声は届けばいい。その者にだけ私は語る。」<sup>2</sup>

いかがでしょうか、彼は自ら信じるジハードのために、すべてを捧げました。自分の職、また公認されているムスリム協会とのつながり、そして財産と家も処分しました。彼は、世界のイスラム界で認められている正当な学者であり、イスラム過激派の信者です。そして、日本のサブカルチャーの中で一般の若者にイスラムを広め、今はマスコミを通して広めています。じわじわと、日本の中にも中東の舞台が入ってきているのです。しかし、私たちが神の国の大義を、彼ら以上に持っているのでしょうか？少なくとも、初代教会の弟子たちはこの学者よりも強い献身をしていました。キリストが王なのです、キリストが主なのです。「イエスが主です」という信仰告白をもって私たちは救われました。この告白をもって神の国を受け継ぎましょう。

---

<sup>2</sup> <http://togetter.com/li/728634>